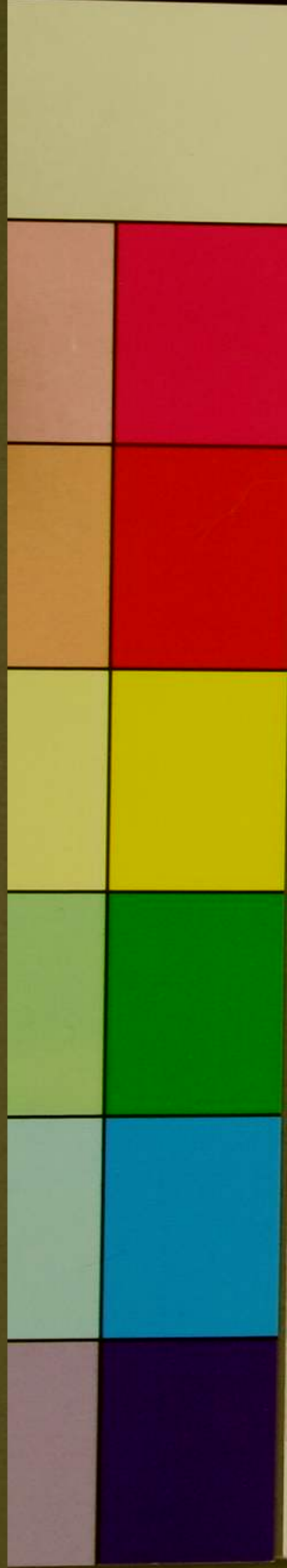


伊馬編輯  
治太平記 二編 上

~14  
2504  
3

情事  
明井





門入遠14  
2504  
巻26-3

村井静馬編輯  
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京書林

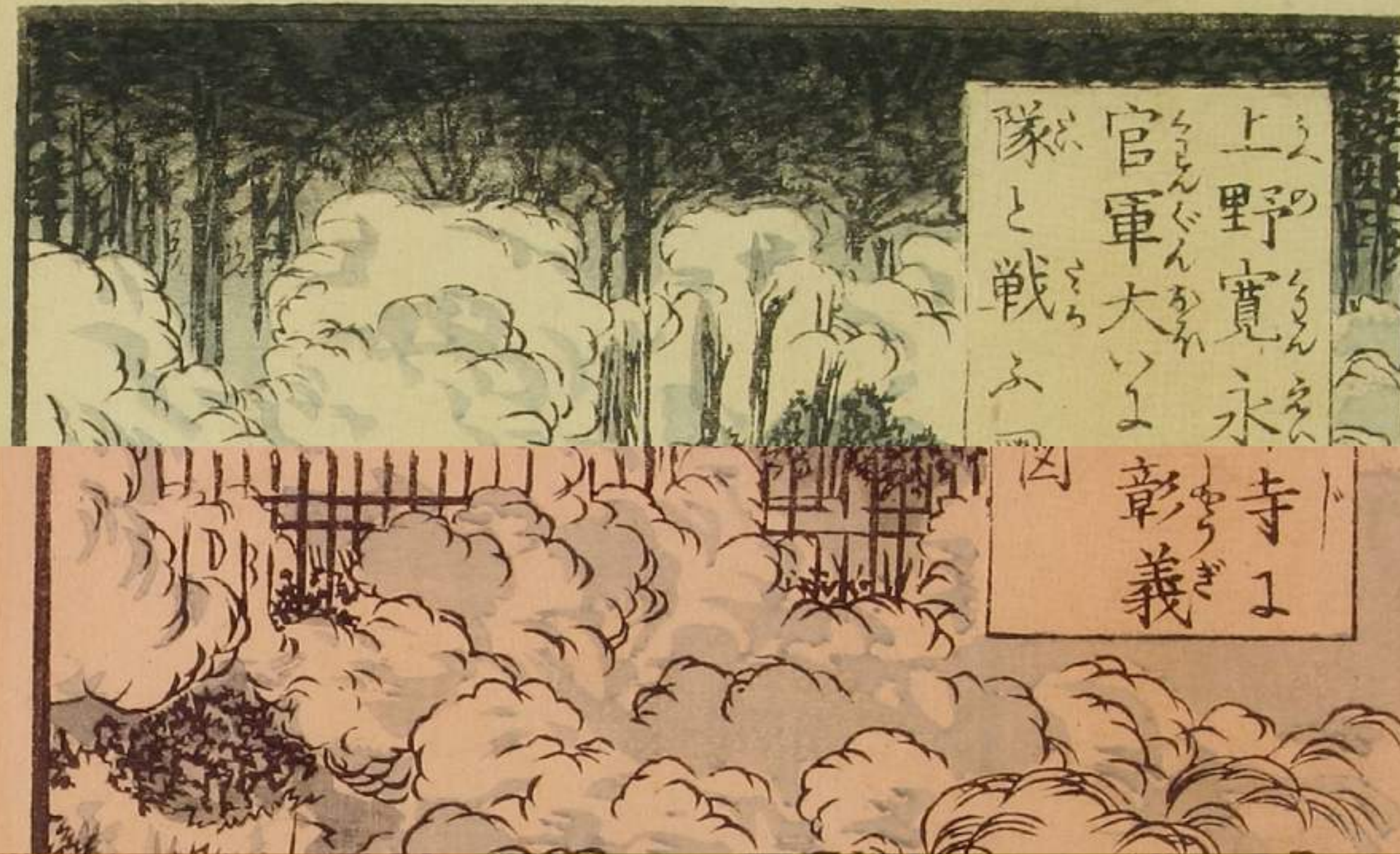
延壽堂發兌

家水祝

以之夢ひの如き濁〜て毛  
すみかえ路もや清國の  
ま〜の〜形〜り〜

この薩摩人八田知紀ぬ〜は吟み〜て歌の意を  
癸丑以降天下は種々の變動あり既に七國躰と濁る  
と做〜つるも遂〜よき澄らるる〜今は聖治よ及べり  
我歡び祝〜その秀逸なれば因〜記〜お〜よあを





上野寛永寺  
官軍大い彰義  
隊と戦ふ





月夜竹林



其二

月夜竹林





卷

卷

明治



人数

或

總督

此時

兵



在り佐土原ハ鎌ヶ谷ヨリウケテ尚モ江戸ヨリ後陣の  
勢の未着ニモ候待ツ折リテ閏四月十日夜も未  
明離レテウチ脱兵不意ニ寄セテ藤堂  
備前の陣營ニ會釈モ多クハ襲撃モ多ク思  
ハ設けぬ支ナリテ兩家の將卒大ニ狼狽  
頓ニ謀計の出リ候知ラズ賊徒等ハ尚勢ハ乗  
トク透サズ砲を發セテ六兩藩士等ハ困  
トク且戦ハ且走ル候賊兵追テ市川の渡一口まで

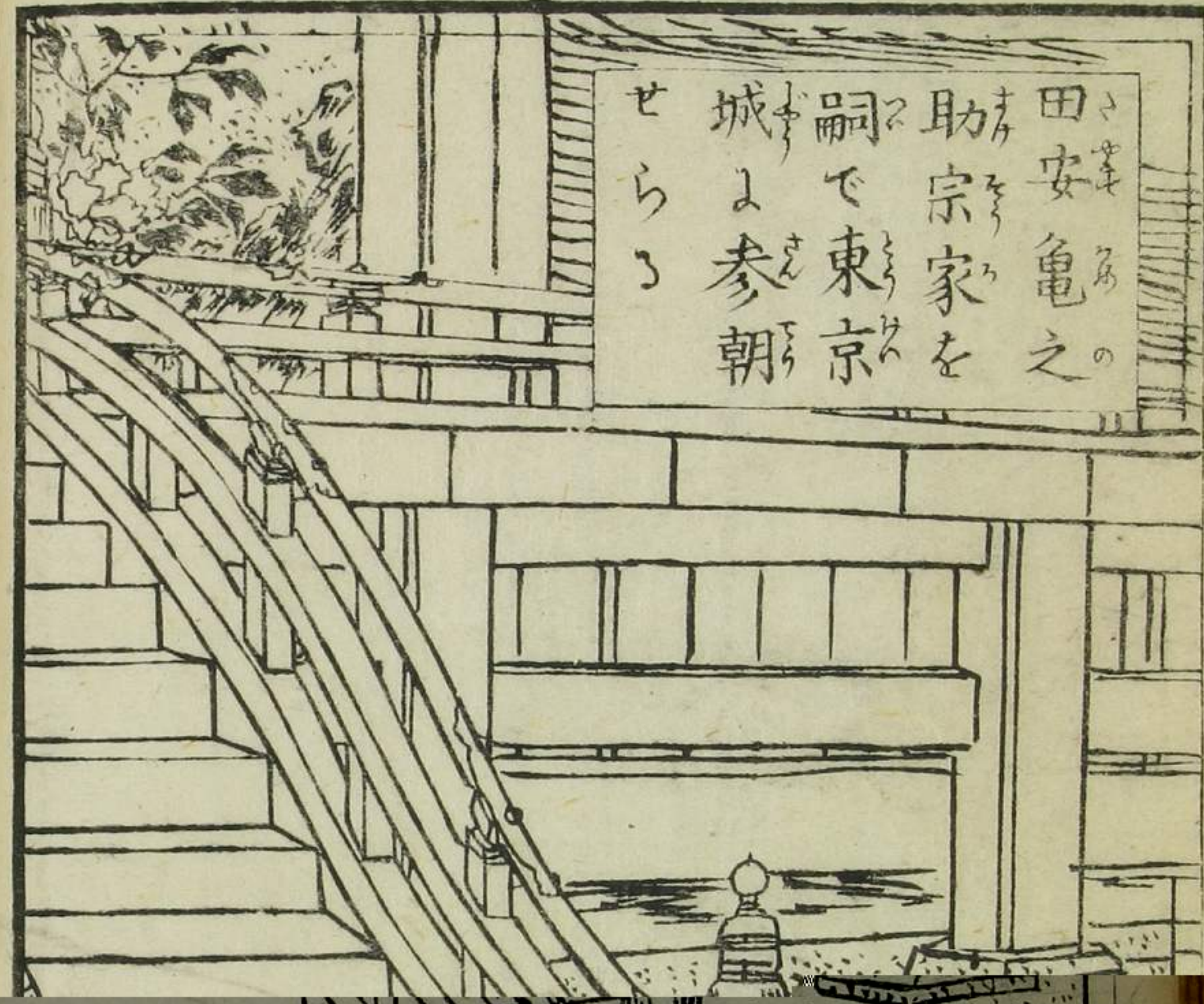
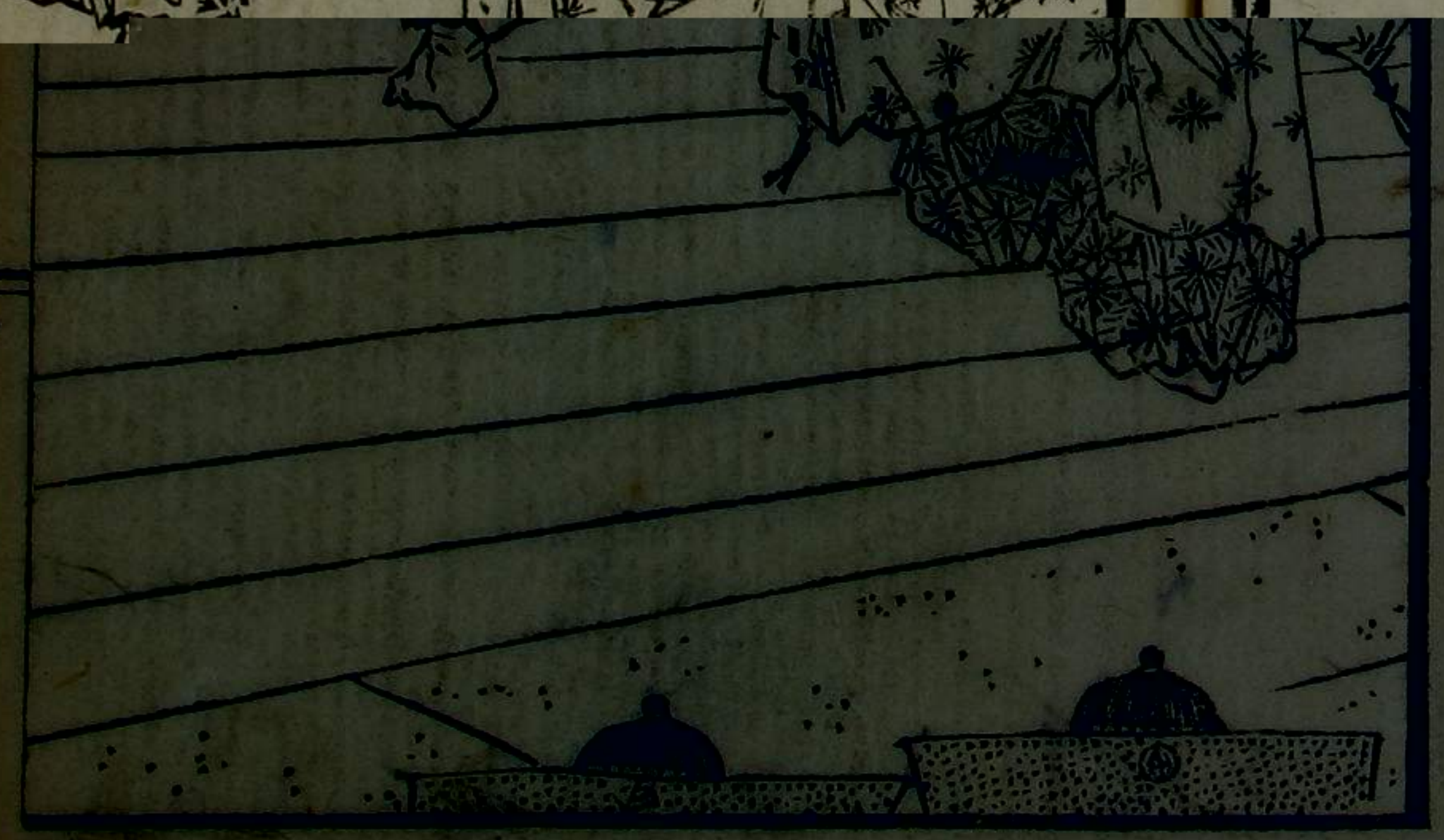
逼ル所官軍トモ候支ヘテ逃レテ為テ船  
争ヒ溺死ナセテモ勘クバ佐土原の兵砲声を聞き  
率ウメ鎌ヶ谷の陣を發テテオモを援ケんとスル  
所へ賊の別軍已ヨリ来リテ途を妨ゲ撃んとス  
佐土原速クも兵を散ラレテ麦畑の裡ニ潛マセ  
賊の来ル候狙撃セテ斃ル者數ヲ知ラズ仍  
官軍白砲を放ラレテその残兵を走ラセテ  
市川の舟場まで兩家を追入タル賊徒等ハ頓



凱歌を唱へて引く舟橋の駅舎のく兵糧を  
食まると一個の間者来り報知れを佐土原  
更に猶豫せず直ち兵と三隊に分け一手ハ海  
手の裏道より進め一手ハ間道より進め残る  
一手ハ本道より真一文字は攻寄せく渠が由断て  
襲ふるぞ賊軍大に狼狽為るる備を直しく  
拒ぐんとするに筑前藤堂備前の兵も追々  
馳至り齊しくおとされ撃つ程に賊徒等諸藩は

圍まはるる尚も臆する気色なく必死とありて  
決戦まじり官軍駅中へ火を放ちく渠が屯所  
を焼立し賊兵終に堪へず移るおのく四方へ  
散乱せり斯く官軍上總に逼りと嚴しく追討し  
及び一三日の間よりその地の賊徒を  
平らげり此月三條左大將より関東の監察使と  
して江戸に在り既より徳川氏の謝罪の實と  
著はせしより三條家詔を奉りて田安亀之助とあり





田安亀之助宗家を  
嗣で東京  
城よ参朝  
せらる





徳川の本家と嗣つグーむ尤も亀之助幼年ある故松平  
確堂ま命トて事ことを撰ちせしむるとふり然しかども未まど何程あの  
石高を賜ふといふ其封額も定まらねば徳川の臣属  
等ハ危あぶ疑うふ者も多く殊とふ城も召上よられ兵器の  
類たひも取上とらるれを激げ徒等とまましく憤う懣んは堪えむ  
同志多人た數あ黨あを興おこす自みづかり之を彰あ義隊と唱なへ  
上野寛永寺の集あまりて輪王寺宮と擁も事と謀ま  
らんとする程ほどは執と當と覺あ王院のある者も彼の激げ徒等との

倣ます所ところを理り義ぎと通とず者ものと称なし私ひそうよ近日きんじつの  
朝あ旨しと批ひ判はんし宮みやと勸すすめず激げ徒等と納いれ而して會あ津  
庄内のあど遙とほうよとれが声こゑ援えんとあせべその勢いきほひ大おほく張はり  
まましく兵へい士しと招まぐらを諸しよ方ほうは脱だつ走そうせし輩たぐひの戦いくさひ  
負まけく伏く匿かく居ゐる者もの追お々とは走ま集ありて最ひそも盛さか大おほく至いたり  
ると雖なも鳥とり合あひの奇あしな面めん々々あるゆ又また定さだまらるる紀き律りつ  
もまく常つねは府ふ下げと游あ歩ほするや何なにれも長ながき刀や帯おびひ  
或ある多た高たかき下げ駄だを履はき暴は慢まん無む頼らの形かたち容ようを倣まし務つと



めく威柄を人よ示せり是時已に官兵等ハ錦符と衣  
 縫付くめて標章とす一々東都の土人等  
 窺うに嘲り錦切と呼びあせり仍く彰義隊の輩  
 ハ途に官兵等ハ行遇ふとた大いよと互に詈辱し  
 めく喧嘩を仕掛るどそれども官軍ハ尚法則あれバ  
 猥りハ渠等と抗論せむ聞ぬ振りて行きまざるを  
 柔弱ありと見侮りんゆく我意と振ふるのまう  
 甚しきに至りてハおまを要殺あせをもめり仍て府下の

虚威  
 を示  
 して  
 彰義  
 隊等  
 官兵  
 と罵  
 る





人民ハ渠等ガ威風を甚ど畏と途を譲りて通せしむ  
彰義隊のいふゆゑに氣を得て疎暴の挙動多うり  
官軍深く憤りて遂に渠等が暴動を奏し之を  
誅せん其を請へり是に於て總督の宮且つ監察使  
三條家より徳川家より令し上野の兵を退りしむ  
と彰義隊等ハ聞入るゆゑに暴威を熾ん  
るも又朝廷まるごと輪王寺の宮と召しと論  
させんと囚りめんど覺王院まる之を拒て宮に参朝

を為しめ朝廷令ハ是非に及な終り彰義隊  
追討の命令を下しめゆ更ニ諸軍の手分定  
り薩州肥後因州の三藩ハ湯島より進み長州肥前  
筑後大村佐土原等ハ本郷より進むべく其餘備前  
藤堂阿州尾州紀州藝州筑前等の兵隊もかのく  
向ふ所を極めて翌日の襲撃するさんとす五月十四  
日の夜に至り此事上野に聞へし是迄虚威を  
示せし族ハ心中大に恐怖しと隊と脱しと走る者



數百人よ及びたり然ととも義を唱へ死と  
 慚うと秘を防禦の準備よ及ぶ程よ左右  
 其夜も明て備十五日の早天よ官軍齊  
 逼るハ彰義隊の輩ハ酒を喫し英氣と  
 寄ると見るとも黒門左右よ押開  
 らず突く出たる勢ひ最も鋭くればさ  
 當りかみく廣小路も退きしり忽地備  
 大砲數發打ちけし或ハ仲町山下よりも

逞兵襲ひ来り三方より攻蒐りしり  
 死憤の勢ひとあり前後左右よ當りしり  
 日雨降続き路次も甚ど悪りし此日ハ  
 烈しく只さ人面も向けがたよ寄手の弾丸  
 一層より烈しくれば遂に門内よ退りし時  
 山王山よ備へしり頻りし砲を放ちし  
 官軍と打つ程よ薩州及び自餘の藩兵木  
 付き夏草とかけ仰ぐおとよ向るとまれ

諸家 立直振 官軍 面も 上野 食ひ

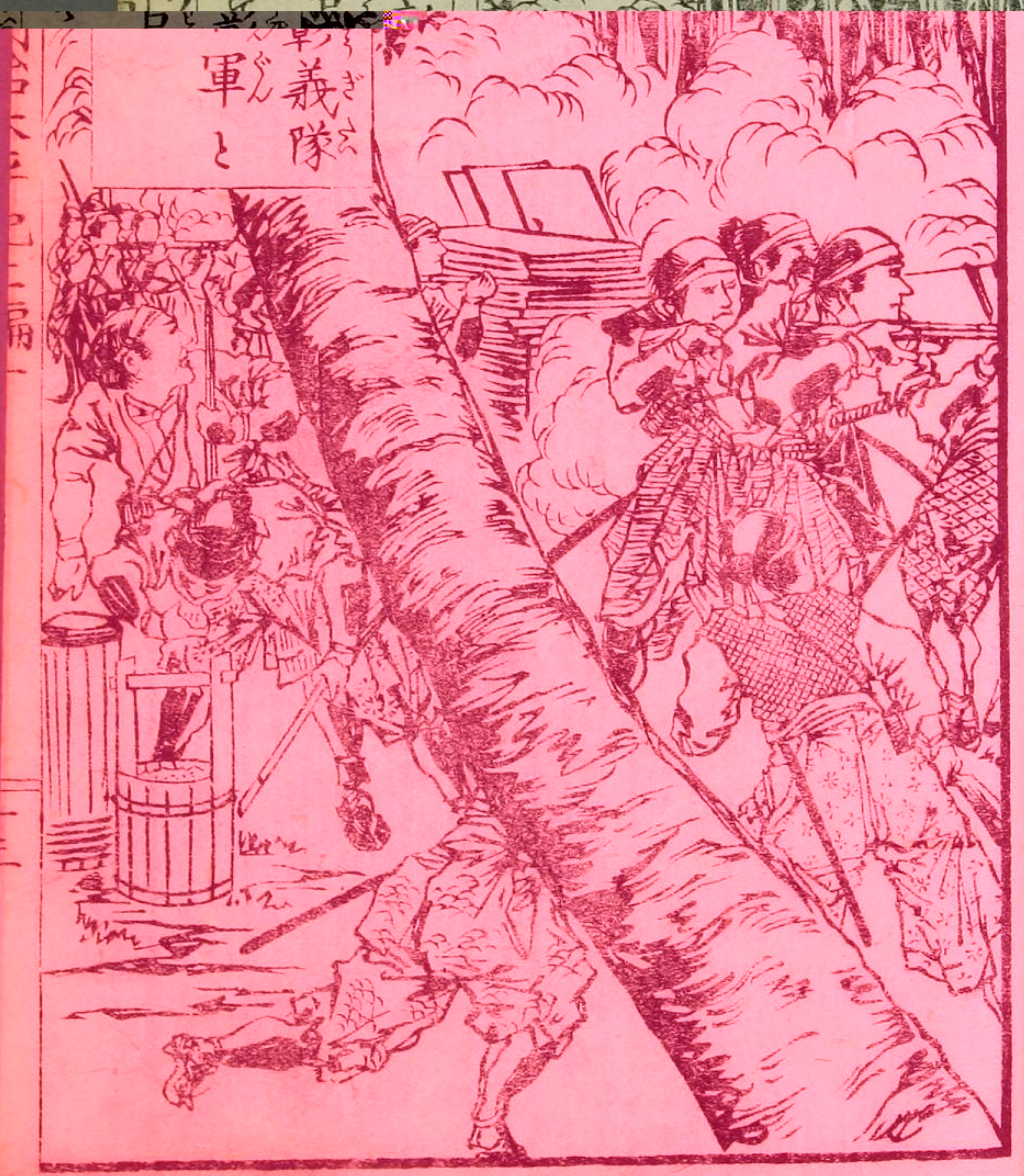
賊徒 此頃 風 雨 賊徒 直下 根 賊徒



いよく奮激しと打落さんと發砲せし人砲玉より中り  
 者其數筭へがごとと雖も寄手ハ更ニ臆ま  
 る色あり打る者と踏越へての大勢爰より進み遂に  
 山上に攀上り白刃と振つと攻詰たる勢ハ破竹の如く  
 是ハ賊徒等支ゆることを得ず山王山と追崩され柵欄  
 據り拒ぐるを官軍燒玉と打掛く火攻よるさんと  
 せし程に先づ山門より燃上り又中堂もも猛火起りて最  
 まるる形状あり是より先覺王院等ハ敵山内に入りと

聴く駭く限り多く僅くは宮を佐けし間道  
 脱走せし後奥州に落たりしとハ彰義隊  
 の激徒等も官軍漸次に入入りて柵欄は火をつけ  
 攻立らるれば姑く抗戦ありし者も最多  
 く今ハ防ぎ術計りて皆散々落んとす  
 根津團子坂をとりて坂本の新門口其他各所は  
 官軍在りて要撃為し是處所彼所を討  
 取らば其れハ辛く走りしを余ハ此役より上野迄





山王山やまのうやま



傍ある町々の兵火の罹りて焼たるは何ヶ所とも限り  
 を知らず殊に柵欄の火は於る宛然雲をつらぬく如き中  
 堂山門總てとも猛火とありて夜も及びて別て  
 尚焰ハ天を衝くごとく目を驚かすをりありて二更に至り  
 とも火も鎮まり上野の一挙平定せり是より人民錦切  
 見て甚ど畏る気色あり仍て官軍の威府下は振  
 へり斯て後幾何とも朝廷まゝりて徳川家の封を定め  
 駿遠奥羽の地を合せ七十万石の高と賜ひ尋る臣属等

の官爵を奪つる始り徳川家の封額のいさゝ定ら  
 ざるうち臣属等うち寄て私に議と言へるや多くハ三  
 百万石あるらん縦ひ夫より尠くとも二百万石ハ下らト  
 ると朝議いふと相待り今此令の出るに至りて衆  
 る大いに打駭き是偏に彰義隊等が事と誤る故  
 らんと言へり夫ハ備おき會津侯の曩に領地は引退  
 き隣藩の諸侯と擔ひ且つ脱走の激徒を納む事と  
 謀るの気色ありみぞ官軍別は會津を討んと加州尾州



薩州長州越前松代松本の兵へ越後口より進發し又  
薩長の別軍及び大垣忍の兵へ奥州白川口へと進きたり  
此時徳川の脱兵等及び仙臺棚倉中村等の兵何れも  
白川の城に據りて大いに勢ひ張示し居たりしが官軍襲ひ  
来ると听くより城を出て邀へ打つ仍る薩長自餘  
の藩兵専ら激戦し及びく死傷の者も多うりし  
うど遂に白川の城を抜き従つて近傍を畧定む  
し及びし此白川とて所は四方へ別る諸道ありて

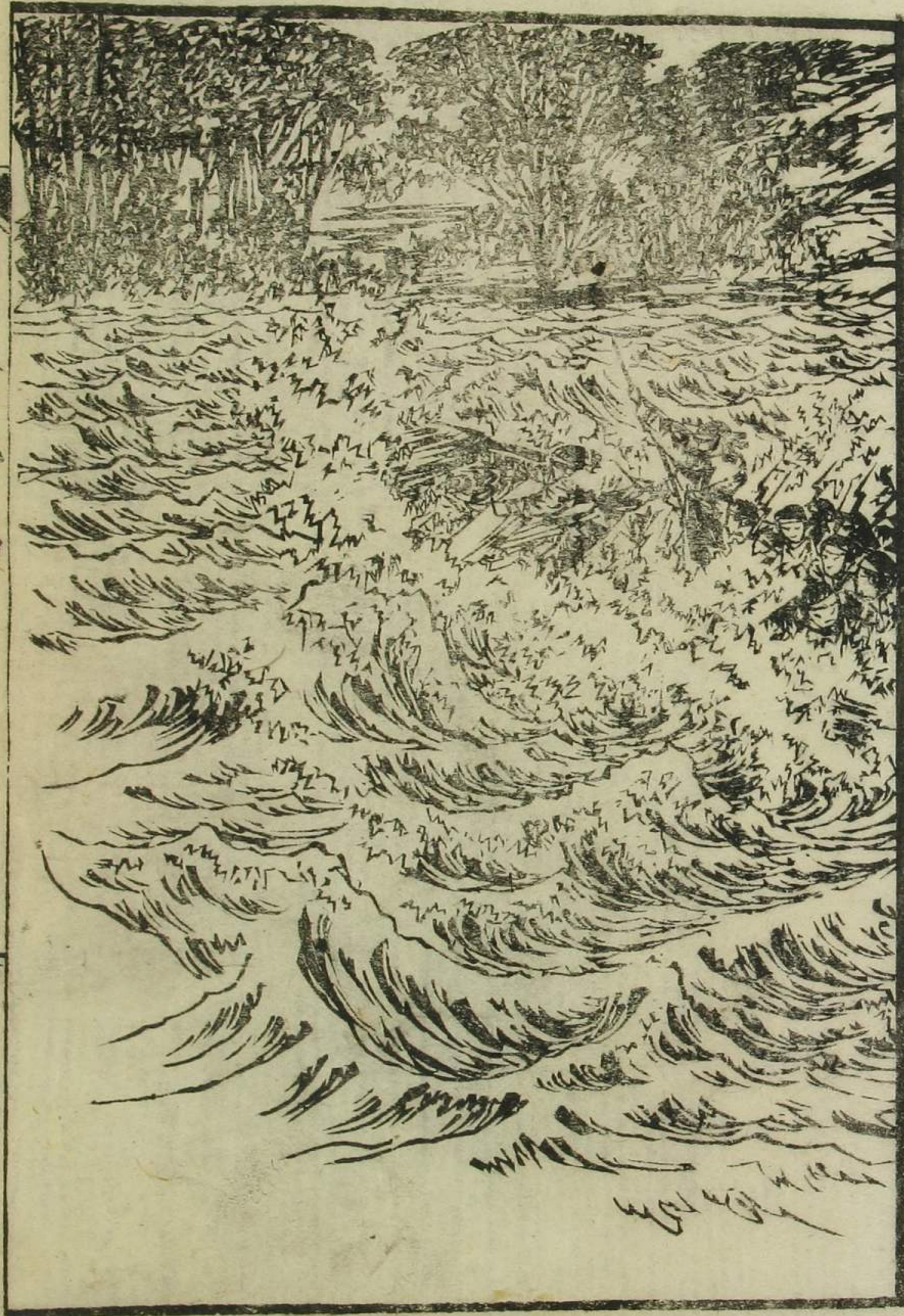
實に奥羽の咽喉多しと賊徒等と息を取返さんと多くの  
兵を驅集り稍白川の城に逼り一挙にと息を落さんと  
せり官軍も又その一城ハ殊に大事と思ふるを頗る防  
禦の手を尽し奮戦し及びく終に渠等と攻破ら  
しむ賊軍再び城に據りたり斯ては越後口へ賊軍  
長岡小千谷の両所は黨を集めて楯籠りし近頃  
水戸の亥黨と喚り市川某朝比奈某等との藩兵四  
百を率ひ来りて賊軍に如たりしと勢ひ日と追て盛ん



時は官軍来り向ひ  
撃く走らせり更  
隔る陣を張り或  
切所々々を固めつ  
さんと競ひぬ是  
へ敵を寄付を連  
勝敗あるの事斯  
ひく俄くふ許多の

の陣所を取圍一  
路よわたる河東の  
見口の官兵ハ  
形状張見より中河  
より所より仍る賊  
援けんと隊長三好  
百人を引候一々朝  
折よ乗ト千曲川を





急流の逆  
波を濟り  
て官軍賊  
陣と撃つ



まゝ此項霖雨降つてきく河  
覆らんとまゝと衆兵あめく  
岸に寄せ陸に上ると其終に  
蒐れば賊徒はよのや此大水を  
由断りたる所又陣中甚ど  
逃走は官軍忽ち大砲を奮  
故死傷の者も最多く尚も  
薩州その餘の兵も植下村と

水大に漲るに其船殆ど  
力と尽し辛く向ひの  
直ちに敵陣に撃つと  
滑つて敵の来るまゝと  
狼狽て兵器をもち棄て  
ひ逃る賊徒は打掛たる  
乱れ散乱せり此と  
ハ所より川を渡りて襲

撃あせば嶺妙見口を敵  
做したる官兵等も射方の大  
敗りしと聞くより蘇生た  
るに数々を尽し討て出  
て又奈何とせまゝ支能  
得たりと衆を激し奮し  
烈しければ賊軍遂に長岡の  
自り火を放ち烟りよ紛れて

の為一切所を絶て孤立  
軍川を清く大に賊徒を  
心地しく両所の兵隊総  
て賊徒前後に敵を受  
総敗軍に及ぶるに官兵  
進んで追うけたる勢に最も  
城を保つ支を得て頓て  
當城の主牧野氏と相携て



城を脱出間道より枋尾とつゝ退くを官軍忽ち  
 長岡の城を乗取るまゝありて白川の城を  
 此程賊徒は取返され官軍敗蹟及び赴き江戸に  
 注進ありて朝廷まゝに因州備前大村柳川佐土  
 原笠間の兵士等と遣はして先隊の兵を援けし是  
 於て諸藩の軍士等奥州口は相會し一同軍議し及  
 びて之を這回ハ總軍大挙して又白川の城に逼り火水は  
 あると攻立ちて賊兵の方をも此一城を取らんとす

筋方の弱きより其是非此城ハ取留人と必死と  
 ありて防ぎしと目餘りたる大軍の透間も  
 せむ砲撃せしむ賊兵終に辟易し堪りしを逃  
 走し官軍再び城を略取す此年の六月とぞ  
 斯く官軍思ひの終は白川城を得たる故ありて  
 會津は向はんとするは賊兵棚倉岩城平の兩城を  
 堅く守るべし官軍兵を二手に分ち一手ハ畑取の  
 進一手ハ本道より進て廿四日の早天は直に



棚倉の城は逼り砲戦時を移せしが遂に未の刻  
より此城落居は及びたり是は於て賊兵等ハ  
残らざ岩城平は籠り回復なまなき志氣を張る  
勇威のめとを戦んあま道ダの官軍進より  
姑く猶豫ひ居たりしが斯く果トと思ふふを已  
し七月初旬より参謀河田佐久間等の面々諸  
藩の兵を會合し頓て攻撃の策を決し因州  
柳川佐土原備前ハ湯本口より兵を進め又柳川の

別軍を先し薩州長州大村等の兵ハ小名濱口  
より向ふたり斯て此月十三日兩道の官軍諸共ハ  
稍平城は逼らんとせし賊徒等豫て此兵の向ん  
支を察しれば城を去る支一里をり切所は土俵と  
積上る砲臺を築きつ賊軍多人數茲は屯ろし  
頻りは防ぎ戦ふ程は寄手も死傷ありとつども  
更は臆より気色よく因州柳川以下の兵士等らハ  
備を打破りて賊兵共を追走らせ城は逼らんと



進すすみしよ又城外きやうがいに閉門しんもんを設けり這所こゝより銃隊じゆうたい連つ發はし拒こぎし敵てきを寄付よせつけず此時このとき柳川やなぎがわの先隊せんたいの兵士へいし奮戰ふんせんありしよ城お破おれ薩州さつしゅうの兵へいハ又外郭がいかくをむ兵取へいとりりし總勢そうせい本城ほんじやうに近ちかづくも賊軍ぞくぐん尚なほも寄付よせつけしと一ツひとつの橋はしを中なに隔へて頻しきりに砲ぱうを發はまれハ官兵くわんぺいハ又また攻破こうぱらんと互あひひし奮戰ふんせんし及およぶ程ほどに須臾しゆゑんも勝負しやうぶも別わかりし事こと

明治太平記二編卷之一終



